

一七世紀のロシア製シベリア諸地図

三 上 正 利

は し が き

- 一、一六世紀末—一七世紀初期のロシア製シベリア地図
- 二、一六二七年の「大地図」とその説明書
- 三、一六三三年のシベリア地図の作製
- 四、一六六七年の「ゴドゥノフ図」

は し が き

ロシアで一七世紀に作製されたシベリア諸地図については、わが国の学界でも有名なバグロフ (L. Bagrow) やバッドレー (J. F. Baddeley) などの英独文で書かれた幾多の論著によって、ある程度は知られている。しかし、ソ連の学者によって行なわれた研究の成果や、バグロフ等に対する反論などは、論文がロシア語で書かれている関係からわが国ではほとんど顧慮されなかったために、わが国の地理学界並びに歴史学界を通じて、一七世紀のロシア製シベリア諸地図について、今日でもなお、正確な知識がもたれていないのは遺憾なことである。

ソ連においても、一七世紀のロシア製シベリア古地図類に対しては、幾多の学者によって研究成果が発表されてい

たのである。それらの諸論考のうちには互に対立する見解もあって、一七世紀のシベリア古地図のすべてについて、ソ連学界における定説が確立されてしまったという現状でもないが、ソ連におけるそれらの研究成果は、最近刊行されたアンドレーフ (A. I. Andreev, 1887—1959) の著書「シベリア史料学概説。第一冊、一七世紀。モスクワ、一九六〇年刊」⁽¹⁾ に、一応まとめられているといつてもよい。著者アンドレーフは、一七世紀と一八世紀とのシベリア史に対する史料学および古文書学においては、ソ連における第一人者と目せられたこの方面の専門家であった。かれの「シベリア史料学概説。第一冊、一七世紀」は、初版が一九四〇年にレニングラードで刊行されたものであるが、その後、この初版に対して著者自ら非常に広範囲な改訂増補を加えた第二版が、一九六〇年に刊行されたのである。

本稿は、従来知られているバグロフやバッドレーばかりでなく、右のアンドレーフの著書をはじめソ連側の研究成果も考慮にいれながら、一七世紀のロシア製シベリア諸地図に関する現在までの諸学者の研究成果を、一応ここにとめて、それをロシア古地図史の一環として概観すると共に、また、それらのうちで現存する古地図類を、一七世紀シベリアの歴史学的並びに歴史地理学的研究のための、資料として利用する場合に、留意すべき種々の問題点を指摘しておくことを目的としている。

一、一六世紀末—一七世紀初期のロシア製シベリア地図

ロシアにおいて地図の作製がおこなわれるようになったのは、一七世紀より古い時代のことである。ロシア地理学史の研究者レーベジェフ (D. M. Lebedev) によると、すでに一三世紀—一四世紀のころにロシアにおける地図作製の可能性が推測されるが、確実な文献に基づいて間接的にでもロシア製地図の存在を主張しうるのは、一六世紀の初

めのことである。その時代のロシア製地図類は現存していないが、それらの地図は、一六世紀前半に他のヨーロッパ諸国で作製されたロシア地図の、資料となったことが確認されている。たとえば次の人々によって作製されたロシア地図、すなわちアグネゼ (B. Agneze, 一五二五年刊)、ヴィエ (A. Vid, 一五五五年刊)、ミュンステル (S. Münster, 一五三七年—一五〇年刊)、ヘルベルシュタイン (S. von Herberstein, 一五四六年刊、一五四九年刊) など、確実にロシア製地図の影響を受けているのである⁽²⁾。

さて、ロシア人によるシベリア征服は一五八〇年代からのものであるが、シベリアの地図 (chertyzhn) とその説明書あるいは目録とでも言うべきもの (rospis) とは、ロシアに併合されたシベリアを一六世紀末から一六三七年まで管轄していたモスクワの旧カザン王国事務取扱所 (Kazansky dvorets) に、一六世紀末から収納されていたようである。また、アンドレーフやレーベシェフの指摘しているところによると、若干のシベリア地図が、一六一四年に当時のロシア外務省 (Posolsky Prikaz) にあつたことがわかる。すなわち、一六一四年にロシア外務省にあつた「諸国図の目録 (Rospis chertezham raznykh gosudarstv)」のなかには、「カザン (Kazan) からシベリアへの道路図。考朽、破損」という記載と、「チェルドウイニ (Cherdyn) からのシベリア図。老朽」という記載があるという。後者の方の地図をフェリ (S. ye. Fel) は一五八七年—一五九七年のものとしていると、これは当時ロシアに知られていた範囲のシベリアの、最も古い地図の一つであろう。しかし右の二図は共に現存していない⁽³⁾。

そのほかにも、この時代にシベリアで地図が作製されたことを推察させる証拠がある。たとえばアンドレーフの記載によると、チュメニの長官ヤノフ (F. Yanov) に対する一六〇〇年一月三〇日の勅令には、ヴェルホトゥリエとチュメニとの間のイェパンチン・ユルト (Yepanchin yurt, 後のトゥリンスク Turinsk) に、宿場と柵とを建設す

ることを命じ、なお、柵と要塞とを地図に描いて、モスクワの旧カザン王国事務取扱所へ送付するように命令している。また、トムスク (Tomsk) を建設するために派遣されたスルグートの長官ピセムスキー (G. Pismensky) とトボリスクの長官トゥイルコフ (V. Tyrkov) とに対する、一六〇四年三月二五日の命令には、都市の附近を觀察して地図に描くことを指令している(4)。

このように、シベリアの地図は一六世紀末から一七世紀初期にかけて作製されたことは判明しているが、それらの地図の現存するものがないために、その面影は知り難い。それゆえに、一七世紀初期のロシア人製シベリア地図の面影を伝えているオランダ人マッサ (Isaac Massa) の、シベリア北部を含む北極海沿岸地方の地図は、貴重な価値をもつ資料であると言わなければならない。かれは、一六〇一年から一六〇九年までモスクワ滞在中に、ロシア人の作製した北部ロシアからシベリア北部にいたる北極海沿岸地方の地図を入手した。マッサはそれの複写図をつくり地名をラテン文字に転写したものを、一六一二年および一六一三年にアムステルダムで刊行されたかれの著書「タルタリーにおけるサモイェード族の記述 (Beschryvinghe vander Samoyeden Landt in Tartarien. Amsterdam, Hessel Gerritsz.)」のなかに挿入したのであった(5) (第一図と第二図参照)。

マッサがロシア人から北極海沿岸地方の地図を入手した事情は、かれ自身の手記によると次のようである。すなわちマッサにはロシアに一人の友人があり、友人の兄弟はシベリアへ行ったことがあって、その兄弟の口授に従って描いたその地方の略図 (skeleton map) を、友人がマッサに与えたのである。その兄弟はすでに死去していたが、その人は自らワイガッチ海峡を通過してオビ川まではどこでも知っていた。しかしそれより先方のことは、伝聞によって知っていただけであった。それ故に入手した地図は海岸の略図にすぎなかった、というのである。マッサの入手し

たロシア人の描いた原図は、多分一六〇四年—一六〇八年の間に描かれたものと推定されている。マッサ複写図の右下に当るタズ川の東岸にマンガゼヤの町 (Mangazeya, Tazovskoi gorod, 一六〇〇年末建設) があるので、この図が一六〇一年以後のものであることは明瞭である(9)。

前記のマッサの、一六二二年と一六一三年との二つの刊行図をみると、地図の西方は、北ドヴィナ川口の西方のウンスカヤ湾 (Unskaya guba, 地図の上では Osciariagoeba と書かれている) に始まり、地図の東方は、シベリアのタイミル半島のピヤシナ川 (Pyasina, 地図の上では Peisida reca となっている) まで描かれ、西シベリアの南



第1図 マッサの北極海沿岸図。1612年刊。
(J. Keuning による)



第2図 マッサの北極海沿岸図。1613年刊。
(Bagrow, L.: Die Geschichte der Kartographie. Berlin, 1951. による)

- ①ウンスカヤ湾 ②アルハンゲリスク
- ③カニン半島 ④チョシユスカヤ湾とコ
ルグエフ島 ⑤ペチャラ川 ⑥ノヴァ
ヤ・ゼムリヤ島 ⑦ヴァイガチ島 ⑧ヤ
マル半島とベールイ島 ⑨トボリスク
- ⑩オビ川 ⑪タズ川とマンガゼヤ ⑫イ
ェニセイ川 ⑬ピヤシナ川

方はトボリスクまでになっている。この二つの刊行図を比較してみると、両図は根本においては同一図とみなし得るが、一六一三年刊図の方が良く、これには若干の補訂がみられる。特に一見してわかる著しい相違は、一六一三年刊図の方には、西シベリアの北部に二人のサモイェード人が描かれ、その上方に数行の説明文が書かれている点である。

とにかくこの両図は、共に初期のロシア製シベリア地図の面影を伝えている現存する最古の地図といふべきで、ロシア古地図史の貴重な資料の一つである。

二、一六二七年の「大地図」とその説明書

一七世紀初期におけるシベリアの地理に関する貴重な文献としては、もう一つ、最近ソ連で諸写本を校合し解説を附して公刊された「大地図の説明書 (Kniga Bolshomu Chertezhu 1627)」がある。この書のシベリアの部分には、西シベリアのオビ川とその支流イルチシ川、イシム川、トボール川その他の諸支流、並びに北方のプル川、タズ川などの流域の、水系や諸都市間の距離などに関する記載があつて、これは西シベリアに関する古い地理的記述の一つである。

この「説明書」が作られた由来は、一六二七年に、当時官職の任命を司っていた役所 (Razryad) において、西シベリアまでを含むモスクワ国の古い「大地図 (Bolshoy Chertyozh)」の忠実な複写図と、モスクワからクリミア半島までのウクライナの新しい地図 (Chertyozh polynu do Perekopi) とを作製させた時に、同時に、これらの新旧両地図に基づいて「大地図の説明書」をも作らせたものである⁽⁸⁾。一六二七年に勅命によつて作られた右の「大地

図」の複写図と説明書との作者は、この役所の職員であったメゼンツォフ (A. Mezentsov) であったことが、一六二七年のかれの請願書が発見されたことから判明した¹⁵⁾。

一六二七年においてすでに使い古されていたという古い「大地図」は、西シベリアまでを含むモスクワ国家の全図としては、恐らく最初のものであったろう。しかし、古い「大地図」の原図も、一六二七年のその複写図も共に現存しておらず、ただ「大地図の説明書」だけが、三七種におよぶ多数の写本として(最も古い書写年代の明記されているのは一六六〇年代の写本であるが)現在まで伝わっているにすぎないので、「大地図」の内容は、「説明書」の記載から推測されるだけである。

古い「大地図」の作製年代については、帝政時代いらいロシアの諸学者によって、種々の見解が述べられてきた。レーベジェフは、それらの主要な見解をあげた後で、この年代決定は困難なことであり、多分一六世紀の最後の二〇—三〇年間に作製されたであろうとしか言えないと述べている¹⁶⁾。しかしアンドレーフの紹介しているところによると、一九四九年にシバノフ (F. A. Shibanov) はこの「説明書」の内容を詳細に検討して、一六二七年の地図の基礎とされたところの古い老朽の「大地図」は、およそ一六〇〇年—一六〇一年ごろに作製されたものであるという結論を出した、とのことである。論証の根拠は、この「説明書」には一五九八年までに建設された都市は全部記載されていること、一六〇〇年および一六〇一年に建設されたトゥリンスクとマンガゼヤ¹⁷⁾、および一六〇四年に建設されたトムスクとケトスク柵とは記載されていないこと、モスクワ国のヨーロッパ部で最も後代に建設された都市としては、一六〇〇年七月に建設されたツァーレフ・ボリソフ市 (Tsarev Borisov, ノーヴィ・ツァーレフ・グラード Novy Tsarev grad) の記載があること、などの事実である。アンドレーフ自身も、このシバノフの結論を正当なも

のと認めている(17)。

なおついでながら、一六二七年に作製された前述のウクライナの新しい地図について言及しておく。この地図も現存しないのであるが、バグロフは、かれがストックホルムの国立図書館で発見した「ウクライナおよびチェルカッスの諸都市の地図」を、その複写図であると考えて公表したのであった(18)。しかしこの見解に対しては、「大地図の説明書」校合本の責任編集者であるソ連のセルピン(K. N. Serpin)は、バグロフによって発見された地図の内容が、「大地図の説明書」に書かれているウクライナの記述に合致しないことを理由にして、バグロフ発見図が一六二七年作製のウクライナ図の複写であることを否定している(19)。

三、一六三三年のシベリア地図の作製

前節でのべた古い「大地図」のシベリアの部分は、その「説明書」から推測し得る限りでは、オビ川流域とタズ川流域との西シベリアだけを含むもので、これは、一七世紀初頭におけるロシア人のシベリアに対する知識を表現しているにすぎない。しかし、一六二七年にその複写図と説明書とが作製された前後には、すでにロシア人はイエニセイ川以東の東シベリアへ進出して、そこに都市や柵を建設していたのであって、「大地図」のシベリアの部分は、すでに当時のロシア人のシベリア進出の実情にそぐわないものになっていたのである。前述のように、一六二七年に新しいウクライナ図が作製されたのも、南ロシアにおける同様な事情によるのであろう。シベリアについても、新しい地図とその説明書とを作製する企てが、このころに起ったのは当然であった。

従来、最初のシベリア全図とみなすべきものは、トボリスクの地方長官ゴドゥノフ(P. I. Godunov)のときにト

ボリスクで作製されたところの、一六六七年のいわゆる「ゴドゥノフ図」であると考えられていた（本稿の第四節参照）。しかるにアンドレーフは、その著書の初版「一七世紀のシベリア史料学概説、一九四〇年刊」のなかで、「ゴドゥノフ図」より古いシベリア全図のことを報じている文献があり、それによると、すでに一六二六年にトボリスクにおいてシベリア全図を作製するように命令が出ていたことを、指摘したのであった。

すなわちアンドレーフの記載によると、トボリスクの地方長官ホヴァンスキー（A. P. Khovansky）の一六二六年の復命書のなかに、同年トボリスクにおいてシベリア全図を作製せよとの勅命を受取ったこと、それに従って、全シベリアの都市と柵との長官に対して、その地域の地図と説明書とを作製してトボリスクへ送付するように命じたことこれらの地図と説明書とがトボリスクへ到着ししだい、シベリア全図とその説明書とを作製して、それをモスクワへ送るつもりであること、を報告しているのである。しかし、これらの作業は遅延したものとみえて、それを促進するためであるが、ホヴァンスキーの次のトボリスク長官トゥルベツコイ（A. N. Trubetskoy）等に与えられた訓令のなかにも、一六二六年の命令が繰り返えされている¹⁵。アンドレーフは、トゥルベツコイ等の一行は、一六二八年初めにトボリスクへ旅立ったに違いないと述べているので、このころまでには、まだ地図はできていなかったものと思われる。

一六二七年—二八年に、右のようなシベリア地図の作製事業が実際に遂行されたか否かについては、今日もなお、それを証明する積極的な資料はない。この時の地図というものは現存しておらず、ただその地図の説明書を写したと思われる写本「シベリアの都市と柵との目録（*Rospisi sibirskim gorodam i ostrogam, …*）」が現存するだけであり、しかもこの写本は、トボリスク管轄下の諸都市の記載がある前半だけで、トムスク管轄下の諸都市の記載があ

つたと推測し得る後半を欠損した不完全なものである (Troy, A. A.: *Sibir v XVII veke*. 1890. 所収)。しか
 アンドレーフは前記の著書の初版(一九四〇年刊)において、確実な根拠もないままに、シベリア全図とその説明書
 とは一六二九年に完成したと推定したのであった(註)。

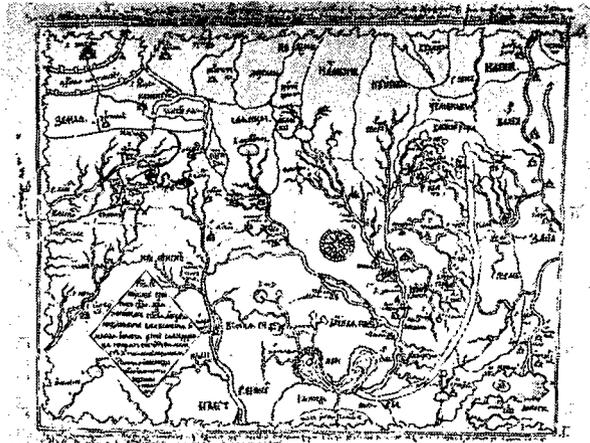
その後これに対し、シベリア史家として有名なバフルーシン (S. V. Bakhrushin) は、かれが一九四七年に発表し
 た論文のなかで、アンドレーフの推定が根拠のないものであることを指摘し、シベリア全図とその説明書の作製年代
 は、説明書のなかに、オビ川下流のコダ (Koda) の土侯ドミトリー・ヤラチュェフ (Dmitry Alachey) の領地とそ
 のオスチャク族との記載がある故、先代の土侯であったかれの父親ミハイル (Mikhail Alachey) の死んだ一六三三
 年以前ではあり得ないと主張した(註)。ヤラチュェフ (Yu. A. Limonov) は、説明書の内容をなお一層詳細に検
 討して、この説明書の作製年代は、ドミトリーがトボリスクに到着した一六三三年一月六日とキルギンスカヤ村
 (Kirginskaya sloboda) の建設された同年三月との間である、という結論に達した。このようなわけで、アンドレ
 ーフはその著書の増訂版(一九六〇年刊)においては、普通に最初のシベリア全図と考えられている一六六七年の
 「ゴドゥノフ図」以前に、最初のシベリア全図とその説明書とが、一六三三年に作製されたと主張しているのである。
 ただしアンドレーフは、この全図は、ウラル山脈からカムチャツカまでを含む今日の意味での全シベリアではなく、
 その当時における意味での全シベリアの地図であると、ことわっている(註)。

バグロフは、アンドレーフの著書の初版(一九四〇年刊)が出た後も、一貫してアンドレーフの考えに反対を続け
 た。バグロフの考えによると、一六二六年に新しいシベリア地図作製の命令は出されたが、地図は実際には作られな
 かったのだ。作製年代も不明で、地図に伴うものであることも明記されていない説明書に、道路の詳細な記述がある

にしても、それを一六二六年の作製命令による地図の説明書とみなすことはできない。最初のシベリア全図は、自分
 がその複写図を発見した一六六七年の「ゴドゥノフ図」だといっているのである¹⁹。バグロフは、アンドレーフの増訂版
 が出るまでに死去したので、説明書の作製年代を一六三三年に確定できることは、知らなかったと思われる。

アンドレーフの増訂版がでた現在、われわれ第三者の立場からは、この論争は次のように考えられる。なるほど地
 図は現存しない。しかし一六二六年の地図作製命令が現存し、また一六三三年と考定される地図の説明書が（それは
 後半を欠損した不完全な写本ではあるが）現存するのであるから、一六三三年ごろにシベリア地図が作製された可能
 性があることは認めなければならぬ。あるいは、さらに一步を進めて、アンドレーフの主張するように多分作製さ
 れたであろうとさえ言えるであろう。

しかしそれと同時に、アンドレーフのように、その当時における意味でのシベリア「全図」というような表現をし
 ながら、「最初」争いをしたのでは、議論の混乱を免れない。そういう意味でならば、時代が下ってロシア人のシベリ
 ア進出範囲が拡大するにつれて、異なる範囲を内包する幾つかの「最初」のシベリア「全図」が有り得るわけである。
 なるほど今日のソ連の地理書では、シベリアと呼ぶ範囲は東西シベリアの地を指し、ソ連極東は別の地域として取扱
 うのが普通である。科学的な地誌として、それは当然のことである。しかし古地図を論ずる場合にバグロフなどが使
 う一般的な用語としては、シベリア全図というのは、カムチャツカまでのソ連極東をも含む北アジア全図と同義語で
 ある。ロシア人がレナ河畔にヤクーツク柵を建設したのは一六三二年のこと、一六三三年ごろといえば、ロシア人
 がやっとイェニセイ川からレナ川流域へ進出しはじめた時代であるから²⁰、この時のシベリア「全図」は、カムチャ
 ツカまでを含むシベリア全図ではあり得ない。この点については、シバノフも指摘しているようである。従って「最



第3図 ゴドゥノフのシベリア図(1667年)の複写図。レメゾフのシベリア地図帳(ハーヴァード図書館蔵)、所収。

1. キタイ王国(中国) 2. アムール川 3. カムチャツカ
4. レナ川 5. オレニョク川 6. イェニセイ川とバイカル湖
7. タズ湾とタズ川 8. オビ湾とオビ川水系(テレツコエ湖から流出するオビ川。イルチシ川とトポール川との合流点のトボリスク。ウラル山脈に発源するトポール川の諸支流)
9. ウラル山脈 10. ベチョラ川 11. コラ半島 12. 北ドヴィナ川とアルハンゲリスク
13. ヴォルガ川とカザン 14. ヴォルガ川口のアストラハン

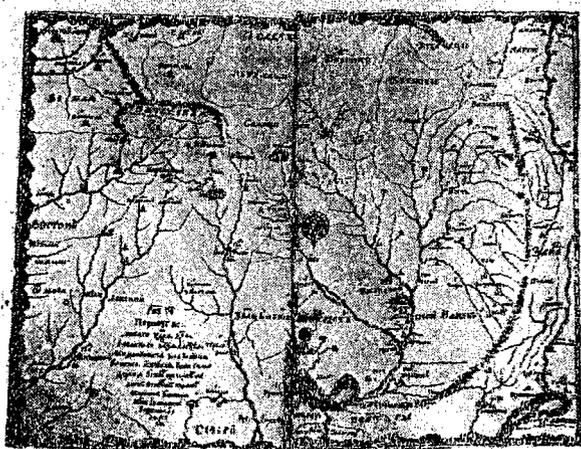
初」争いの議論の混乱をさけるために、シベリア全図というのは北アジア全図と同義語であると定義するならば、シベリア全図は一六六七年に初めて作製されたというバグロフの主張を認めることは、かりに一六三三年図の作製が実際にあったとしても、われわれには可能であると考え。

四、一六六七年の「ゴドゥノフ図」

一六六七年にトボリスクで作製されたシベリア全図、いわゆる「ゴドゥノフ図」は、シベリア古地図史の貴重な資料であるが、今日その原図は伝わっていない。しかし幸にも、それを複写した若干の写図が現存し

てゐる。

それらの内で、「ゴドゥノフ図」のロシア語のままの複写図は、二つしかない。その一つは、バグロフがセミヨン・レメンゾフ(Semyon U. Remezov)のシベリア地図帳の一冊(註)のなかにあるのを発見して、初めて一九一四年に「ア



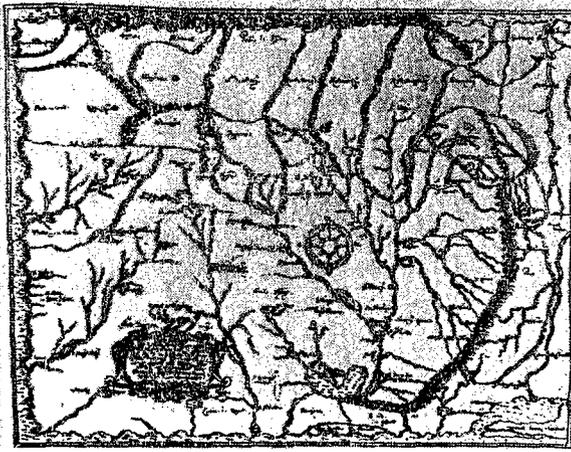
第4図 ゴドゥノフのシベリア図(1667年)の複写図。レメゾフのシベリア地図帳(レニングラードの国立公共図書館蔵)、所収。(A. V. Yefimov による)。

シフロシマ」第四巻の地図帳(Atlas aziatskoi Rossii. S. Peterburg, 1914)その他に発表して以後、しばしばその写真版を公表したので、一般に知られるようになったものである(第三図参照)。

もう一つは、アンドレーフが、レニングラードの国立公共図書館所蔵のレメゾフの別のシベリア地図帳(Sluzhebnyaya chertyozhnaya kniga)⁽²³⁾のなかにあるのを発見して、その写真複製図をイエフィーモフが公表したものである⁽²³⁾。この方は、前者ほどには知られていないように思われる(第四図参照)。

そのほかには、「ゴドゥノフ図」が作製されてのち間もなくロシアへ来たスウェーデン人が、モスクワで複写したものが三種ある。すなわち一六六八年一二月から翌六九年二月まで、モスクワへ来て滞在していたスウェーデンの使節クロンマン(Fr. Kroneman, Cronman)とも書くと、同使節団に随行していたプリュツ(K. J. Prutz, Prys)とも書く)とは、「ゴドゥノフ図」の地名などロシア語をスウェーデン語に転写しながら、それぞれ一枚ずつの複写図を作製したのである。そのときの事情はクロンマンの手記によると、「かれらはまた私に、すべてこれらの諸国土とシナにいたるまでのシベリアとの地図を示した。

これは勅命によって、トボリスクの地方長官ゴドゥノフが、最近送ってきたものである。私はこの地図を一晩だけ手もとに置く許可を得て、一枚の複写図を作製した」のであった。このとき二人の作製した二種の複写図は、プリュツのはストックホルムの帝室図書館にあり、クローンマンのはストックホルム図書館にあったのを、ノルデンシヨルド(A. E. Nordenskiöld)が発見して、早く一八八七年に公表した⁽²⁴⁾。



第5図 ゴドゥノフのシベリア図(1667年)の複写図。
パルムクヴィストの図帳、所収。(A. V. Yefimov
による)。

スウェーデン人によるもう一種の複写図は、一八九八年にストックホルムで刊行されたパルムクヴィスト(E. Palmqvist)の図帳のなかにある(第五図参照)。パルムクヴィストは、一六七三年—七四年にモスクワへ来たスウェーデンの使節団に参加していた同国の陸軍武官である。パルムクヴィスト図の複写は、一八九七年のノルデンシヨルドのペリプルスにも収載されている⁽²⁵⁾。

なおバグロフは、ドイツのシュテチン(Stiftungs-Gymnasium, Stetin)にある若干の複写図をも指摘しているが、それらの図は未公開のままになっているとい⁽²⁶⁾う。

さて、最初に述べたバグロフ発見のレメゾフ地図帳のなかの写図には(第三図参照)、図郭の上と下との欄外に

四行にわたって、この地図帳の作者セミヨン・レメゾフの書き込みがある。この書き込みの内容には、一七世紀のシベリア地図史にとって可なり重要な幾つかの問題点を含んでいるのであるが、この文字の判読は、かなり困難なものであるらしい。すでに一九一九年にバッドレーは、将来訂正されるべきものであるという但し書きをつけて、英文のその試訳を發表しているが⁽²⁷⁾、一七世紀のロシア古文書の専門学者であるアンドレーフの解読文とは可なりの相違がある。アンドレーフの解読によると、このレメゾフの書き込みは、大要次のような記載である。ただし「」のなかは本稿の筆者「三上」が補記したものである。

第四章。「押型文字の」印刷された (pechatny) 原地図の複写図。この地図は、七一七六六年に「西暦一六六七年に⁽²⁸⁾」、皇帝の勅命によりトボリスクにおいて、貴族の地方長官ピョートル・イワノヴィチ・ゴドゥノフ (Pyotr Ivanovich Godunov) 自らの労作と筆写とによって、押型文字を印刷して (pechatnym tiseniem) 作製された。

地図には、トボリスクと他のシベリア諸都市並びにそれらの土地と川の沿岸の村々が記入され、それらの間の距離が、適当な土地台帳もなく作業に関係した古老もなかったために必ずしも常に正確ではないが、簡略に示された。この「押型文字の」印刷された地図以前には、トボリスクとシベリア地方の地図はシベリアにはなかった。この最初のゴドゥノフの「押型文字の」印刷された地図は、一七六年「西暦一六六七年」から現在の二〇五年「西暦一六九六年」まで、村も郷も敵意ある「異民族の」土地も、補足されないままである⁽²⁹⁾。

さて、右のレメゾフの書き込みには、若干の重要な問題点を含んでいる。まず第一には、レメゾフの書き込みによると、トボリスクには一六六七年の「ゴドゥノフ図」以前にはシベリア全図は無かったということであり、また、その後この書き込みが行なわれた一六九六年までの間に、新しいシベリア全図は作製されなかったという意味のように

思われる。この記述に対するアンドレーフの批判は、次のようなものである。すなわち前述のように、「ゴドゥノフ図」以前にはアンドレーフの主張する一六三三年のシベリア全図があったのであり、また一六六七年以後にも一六九六年までの間には、二回のシベリア全図の作製があったのだから、レメゾフの手記のこの部分は正確でない⁽³⁰⁾、というのである。アンドレーフが二回のシベリア全図と言っているのは、その文章の前後の関係から推定すると、一六七三年のシベリア全図と、一六八四年―一八五年のシベリア全図とを、指しているものと思われる。

われわれ第三者の立場からすると、すでに第三節で考察したように、一六三三年のシベリア全図は実際に作製されたか否か確証はなく、また実際に作られたとしても、その「全図」という意味は東シベリアまでを指す条件つきのものであるから、レメゾフの手記のように、「ゴドゥノフ図」が最初のシベリア全図（太平洋沿岸までのシベリア全体の地図）であると考えるのは可能であることを、認めなければならない。また一六七三年のシベリア全図（従来は一六七二年図とって紹介されていたもの）は、諸学者の一致した見解によるとモスクワで作製されている地図であって、トボリスク在住のレメゾフは、この時（一六九六年）には知らなかったと考えられる。このことはアンドレーフ自身も、後に一六七三年図を論ずるときに認めているのであるから、この地図の存在を指摘してレメゾフの書き込みの不正確さと言うかれの議論には矛盾がある。レメゾフがモスクワへ行ってシベリア省でシベリア地図の作製に従事したのは、一六九八年八月以降のことであった。このように見ると、ただレメゾフのシベリア地図帳（註21参照）のなかにある一六八四年―一八五年のシベリア全図についてだけ、疑問が残るにすぎない。従って、アンドレーフのようにレメゾフ書き込みのこの部分を不正確として軽視することはできず、少なくとも、「ゴドゥノフ図」がトボリスクにおいては最初のシベリア全図であったことは、たとえ一六三三年図があったとしても、われわれには是認すべきものの

ように考えられる。

第二の問題点は、レメゾフの書き込みにみえる「pechatny」というロシア語の解釈である。これは「押型で押したる」とか「印刷された」とか訳し得る語である。バグロフが一九一四年に「ゴドゥノフ図」のこの写図を発見して以来、バグロフを始めとして一般には、一六六七年の「ゴドゥノフ図」は当時トボリスクにおいて印刷されたと思われていた。そのうえ、バグロフはその一九五二年の論文では、わざわざ註をつけて、この地図が印刷されたことはミユルルス (A. Millerus) およびヴィートセン (N. Wisen) の著書から知られる⁽²⁷⁾、と念を押しているのである。しかしアンドレーフは、一六六七年の地図の印刷された実物は一枚も現存しないこと、またこの時代には、モスクワの印刷局 (Pechatny dvor) で作製されたモスクワ国の印刷地図というものはないのに、なぜかシベリア地図に関して例外であるというのは、ほとんど有り得ないことであると言って、地図が印刷されたことを否定する。アンドレーフは、レメゾフの書き込みに「印刷された」地図と書かれている意味は、その地図のなかの標題 (nadpis) が、前の書き込みの文章のなかにも見えているように、押型文字を印刷して——すなわち印刷された文字で (pechatnymi bukvmi)——なされている地図という意味である、と主張している⁽²⁸⁾。

バグロフとアンドレーフとの「ゴドゥノフ図」の印刷をめぐるこの論争に関しては、筆者はいま批判するための資料をもたないので、ただここに両者の対立する主張を紹介しただけに止めておきたい。

第三の問題点は、いわゆる「ゴドゥノフ図」の実際の作者は誰かという問題である。セミヨン・レメゾフの前掲の書き込みには、ゴドゥノフが自らの労作によって、地図を作ったように書かれている。しかしこの記載に対しても、アンドレーフは次のように批判的である。すなわち、この地図のなかに印刷された文字で記入されている標題には、

「……この地図はトボリスクにおいて、貴族の地方長官ピョートル・イヴァノヴィチ・ゴドゥノフとその同僚の努力によって、紙の上につくられた」と、簡潔に記述されているばかりであるから、ゴドゥノフとその同僚とは、この集成図の作製に対する処置を講じただけで、自らその作業に参加したのではなく、ゴドゥノフが作者であるということとは、固執すべきではないというのである⁽³³⁾。

また、「ゴドゥノフ図」の作者についてのバグロフの考えは、次のようである。すなわち、ゴドゥノフの監督のもとに (under the supervision) つくられたこの地図は、後のシベリア地図家セミヨン・レメゾフ (いま問題にしている書き込みの筆者) の父親の、ウリヤン・レメゾフ (Ulyan Remezov) によって描かれたと推測することができる。ウリヤンはゴドゥノフの親密な協力者で、ゴドゥノフに随ってどこにでも行った人であり、旅行のときにも、また後にゴドゥノフが免官されたときにも、随行した人物であったからである⁽³⁴⁾、と。

このバグロフの推測に対しても、アンドレーフは批判的で、次のように言う。一六六七年図の作製に、ウリヤン・レメゾフが直接参加したという確実な証拠は何もない。バグロフはここでも証拠をあげないで、ウリヤンが実際ゴドゥノフの側近者であって、一六六七年図の作製のように重要な仕事に参加しないはずはない、という一般的状況に立脚している。それはバグロフの考える通りであったかも知れないが、一六六七年図の作製にウリヤン・レメゾフが参加したのであるならば、かれの息子のセミヨン・レメゾフが知っていたらうことは疑いなく、それ故に、セミヨンが「シベリア史 (Istoriya Sibirskaya)」を書いて父親のウリヤンの業績に言及したときには、そのことを想起しただずである⁽³⁵⁾、と疑問の意を表してバグロフの推測を批判している。

セミヨン・レメゾフの書いた「シベリア史」というのは、現在では「レメゾフ年代記 (Remezovskaya letopis)」

と呼ばれているもので、このなかで著者セミヨンは父親のウリヤンの人物と業績についても記述しているのであるが³⁶⁾、父親が一六六七年図の作製に参加したことは記載していないので、アンドレーフは疑問に思っているのである。この疑問は当然のことであり、またバグロフの考えも周囲の状況に基づく単なる推測の域を出ないものであるから、第三者のわれわれの立場として確実に言えることは、一六六七年のシベリア図は、トボリスクの地方長官ゴドゥノフの監督のもとに作製された地図である、というに止まる。次に考察するこの地図の説明書のなかにも、ゴドゥノフの「監督のもとに (po vysmotru)」という語が使われているのである。

さて最後に、この「ゴドゥノフ図」に対して書かれた目録(あるいは説明書)の問題である。アンドレーフによると、一六六七年のシベリア地図は、その地図に対して目録(説明書 *rospis*)と共に、モスクワのシベリア省(Sibirsky prikaz)へ送られた。今日その目録は中央国立古文書館(Ts. G. A. D. A.)のシベリア省関係古文書のなかに現存しており、その標題は「一七六年のシベリア地図に対する目録……(Rospis protiv chertezhu 176g. sibirskikh zeml...:.)」となっている。古文書として現存するこの目録最初にて注目したのは、帝政時代の歴史家オグロブリン(N. N. Ogloblin)で、それは一八九一年のことであったが、この目録はその後未公開のままになっているという³⁷⁾。

これとは別に、一九世紀末のその当時、やはり一七六七年のシベリア地図に対する目録といわれていたものがある。これの方は、ルミヤンツェフ伯爵(N. P. Rumyantsev) 集蔵の写本をもとにして、チヤフ(A. A. Titov)がその著書「一七世紀のシベリア(Sibir v XVII veke. Moskva, 1890)」のなかに入れて公開した。この標題は「皇帝アレクセイ・ミハイロヴィチの勅命によりトボリスクにおいて集成された全シベリアの地図(Chertezhi vsej Sibiri, zbirannie v Tobolske po ukazu tsarya Alekseye Mikhailovicha)」となっており、前述のシベリア省

の写本の標題とは違っている。これら両方の目録は、その標題が異なるばかりでなく、オグロブリンが両目録を比較したところによると、後者には脱漏（または省略）があり、固有名詞や数字にも相違があるという⁽³⁸⁾。しかし刊本の方が利用に便利であるためか、その後「ゴドゥノフ図」の説明書としては、後者のチトフ収載本の方を参照する場合が多かったようである。

バッドレーも、すでに一九一九年に、バグロフ発見の「ゴドゥノフ図」の写図と、前記の目録のうち後者のルミヤンツェフ集蔵本の方の目録の内容とを比較して、地図と目録との間に可なりの相違があり、目録に記載されている地名の数は地図の地名数より多いことを指摘している⁽³⁹⁾。

シバノフ (F. A. Shibanov) も一九四九年に、同様に一六六七年のシベリア地図と、チトフ刊行のルミヤンツェフ集蔵本の方の目録とを比較した。その結果によると、目録には都市、柵、修道院、宿場村、村、冬宮所などの集落の数は七一カ所あるのに対して、地図には五七カ所しかない。また目録には川が六八あげられているが、地図には川が一四〇も示されている。目録にはシベリアとその隣接地方に住む部族名はほとんど書かれていないのに、地図の方は、シベリアとその隣接地方との民族誌地図とでも呼ぶような状態であって、地図と目録との間には著しい相違がある。結局このチトフ刊行のルミヤンツェフ集蔵本の方の目録は、全体として軍事的・戦略的な傾向をもつシベリアの地理的記載であって、その内容においてもその作製目的においても、一六六七年のシベリア地図に対する目録とみなし得ないものである、という結論が出た。この目録は、主としてシベリア省関係古文書のなかにある方の目録から、資料を借用して、それに加筆してできたものであることが判明したのである⁽⁴⁰⁾。

右のシバノフの得た結論にはアンドレーフも同調しており、さらにアンドレーフは、現在必要なことはシベリア省

の方の目録を公刊することである、とも言っている。一六六七年の「ゴドゥノフ図」の現存している各種の複写図は、その内容に多少の相違もあるので（たとえば、「カムチャツカ」という文字の記載があるのは、バグロフ発見のレメゾフ地図帳のなかの複写図＝本稿第三図だけである）、ゴドゥノフ図とその複写図とに対する詳細な論考はこの目録の公刊を待って、目録と地図とを比較しながら行なわれるべきであらう。（未完）

附記 本稿執筆に使用した文献の複写には、京大文学部地理学教室の織田武雄博士、水津一朗氏、末尾至行氏、東大東洋文化研究所、東洋文庫、並びに室賀信夫博士の御援助を得た。ここに深謝の意を表する。

- 註(1) Andreev, A.I.: Ocherki po istochnikovedeniyu Siviri. Vypusk I. XVII vek. Moskva, 1960.
 (2) Lebedev, D.M.: Ocherki po istorii geografii v Rossii XV i XVI vekov. Moskva, 1956. str. 199-206.
 Belov, M.I.: Istorija otkryitiya i osvoyeniya severnovo morskovo puti. Tom I. Moskva, 1956. str. 40-44.
 (3) Andreev, A.I.: op. cit. str. 26. Lebedev, D.M.: op. cit. str. 214.
 (4) Andreev, A.I.: op. cit. str. 26.
 (5) Keuning, J.: Isaac Massa. (Imago Mundi. X. 1953). pp. 67-68.
 (6) Ibid. p. 68. Lebedev, D.M.: op. cit. str. 218.
 (7) Serbin, K.N. red.: Kniga Bolshomu Chertezhu. Moskva, 1950.
 (8) Ibid. str. 4-5, 49.
 (9) Andreev, A.I.: op. cit. str. 27.
 (10) Lebedev, D.M.: op. cit. str. 222-226.

- (11) シンノフの論文が發表された翌年に公刊された右の校合本「大地図の説明書」によると、マンガゼヤは本文の五〇頁、一六一頁、一六八頁の三カ所に記載されている。シンノフはマンガゼヤの記載がないテキストによつたのであろうか。なおマンガゼヤの建設年代は一六〇〇年末であること、ペーロンが一六五五年のアルグノン (L. Argunov) の請願書に基づいて建設した事°
Belov, M. I.: op. cit. str. 112. snoska 3.
- (12) Andreev, A. I.: op. cit. str. 28.
- (13) Bagrow, L.: Sparwefeld's map of Siberia. (Imago Mundi. IV. Stockholm, 1947). p. 68.
- (14) Serbin, K. N. red.: *Kniga Bolshomu Chertezhu*. Moskva, 1950. str. 5-6.
- (15) Andreev, A. I.: op. cit. str. 28-29.
- (16) *Ibid.* str. 30-31.
- (17) Bakhrushin, S. V.: *Polozhitelnie rezultaty Russkoy kolonizatsii v svyazi s prisoyedineniem Yakutii k Russkomu gosudarstvu*. (Nauchnie trudy. Tom III, chast 2. Moskva, 1955). str. 237.
- (18) Andreev, A. I.: op. cit. str. 30-34.
- (19) Bagrow, L.: op. cit. pp. 67-68, 83. *Idem*: *Die Geschichte der Kartographie*. Berlin, 1951. S. 177-178. *Idem*: *The first Russian maps of Siberia and their influence on the West-European cartography of N. E. Asia*. (Imago Mundi. IX. 1952). p. 83.
- (20) Bakhrushin, S. V.: *Ocherki po istorii kolonizatsii Sibiri v XVI i XVII vv.* (Nauchnie trudy. III. Moskva, 1955). str. 151-152, 121-122.
- (21) *The atlas of Siberia by Senyon U. Remezov*. Facsimile edition with an introduction by Leo Bagrow. The Hague, 1958.

最近オランダで出版されたこのシベリアのシベリア地図帳(ベントンの母体とヤコブ・Khorograficheskaya Chertehnaya Kniga) は、ベントンの序文で解説しているように、この地図の原本は帝政末期にはヴォロニン・ダニロフ伯爵 (Vorontsov-Dashkov) の蔵書になっていたが、その後転々として、革命後にベントンの所有に帰し、現在はハーヴァード図書館 (Harvard Library) の蔵書になっているのである。

- (22) Ruk. old. CPB, Ermit. sobr., No. 237. Leningrad.
- (23) Yefimov, A. V.: *Iz istorii Russkikh ekspeditsiy na Tikhom Okeane*. Moskva, 1948. str. 56.
- (24) Baddeley, J. F.: *Russia, Mongolia, China*. London, 1919. vol. I, cxxvii.
- (25) Nordenskiöld, A. E.: *Periplus*. Stockholm, 1897. Tav. XXXVII.
- (26) Bagrow, L.: *Sparwefeld's map of Siberia*. (Imago Mundi. IV. 1947). p. 68, note 13.
 Idem: *The first Russian maps of Siberia*.....(Imago Mundi. IX. 1952). p. 84.
 シンロンの記述した若干の複写図を、左記のなかにあてはうべ。
- Müllerus, A.: *Imperii Sinensis Nomenclator*. 1680.
- (27) Baddeley, J. F.: *Russia, Mongolia, China*. London, 1919. vol. I, cxxvii.
- (28) ショーテツ大帝が一六九九年二月二十九日で改暦の勅令をなした事は、ロシアの暦年は世界陽曆紀年とすべし、西曆前五〇九年を元年として数えるものであった。従つて陽曆紀年一七〇六年から（ロシアの古文書では、これを単に一七〇六年とす）風を略記する場合はしほしほあるが、一七五〇九年を引算すると、該当する西曆一六六七年が得られる。また日付は、一七世紀では一〇日を加え、一八世紀では一一日を加えると西曆に該当するのである。ただし、この時代の一年の始めは九月であったから、一七〇六年は正確にいうと、西曆一六六七年九月一日から翌六八年九月一〇日まで的一年間に該期たるのである。左記参照。 Cahen, G.: *Histoire des relations de la Russie avec la Chine sous Pierre le Grand (1689-1730)*. Paris, 1912. (repr. 1941). p. 33, note 1.
- (29) Andreev, A. I.: *op. cit.* str. 35-36.
- (30) *Ibid.* str. 36.
- (31) Bagrow, L.: *The first Russian maps of Siberia*.....(Imago Mundi. IX. 1952). p. 83, note 3.
 シンロンが誤解したところのこの題所である。 Müllerus, A.: *Imperii Sinensis Nomenclator*. 1680. p. 1.
- Witsen, N.: *Noord- en Oost Tartarya*. v. I, p. 3.; v. II, p. 859.
- (32) Andreev, A. I.: *op. cit.* str. 36.
- (33) *Ibid.*

- (35) Bagrow, L.: The first Russian maps of Siberia..... p. 83.
- (36) Andreev, A.I.: op. cit. str. 42.
- (37) Bakhrushin, S.V.: Ocherki po istorii kolonizatsii Sibiri v XVI i XVII vv. (Nauchnie trudy. III. Maskva, 1955). str. 32-33.
- (38) Andreev, A.I.: op. cit. str. 38.
- (39) Ibid. str. 38-39.
- (40) Baddaley, J.F.: Russia, Mongolia, China. London, 1919. vol. I, cxxvii, cxxviii-cxxxii.
- (41) Andreev, A.I.: op. cit. str. 39-40.

(昭和三十六年十一月二〇日稿)